

三橋敏雄略年譜

(平成14年3月号『俳句』<追悼大特集・三橋敏雄の生涯と仕事>(角川書店)に掲載された略年譜より転記)

*この略年譜は『三橋敏雄全句集』(立風書房)、『<花神コレクション 俳句>三橋敏雄』(花神社)、『三橋敏雄』(春陽堂俳句文庫)及び『俳句』の「黒田杏子が聞く証言・昭和の俳句」収載の自筆年譜を参考にした。(編集部)



大正九年(1920)

十一月八日、東京府八王子市に生まれる。織物・捺染技術者の父儀平、母セイの次男(前年に生まれた長男は生後間もない八月三日に死亡)。

大正十二年(1923) 三歳

三男である弟が生後間もなく長男と同じ八月三日に死亡。九月一日、生家で関東大震災に遭う。

大正十三年(1924) 四歳

十二月、弟聖二生まれる。

昭和二年(1927) 七歳

八王子市立第一尋常小学校に入学。(昭和五年、新学区編入により第四尋常小学校に移る)十二月、妹房子生まれる。

昭和八年(1933) 十三歳

八王子市立尋常高等小学校高等科に入学。校長が北原白秋文科の歌人だったことから、短歌に興味を持ち、歌集を読み始める。父は「ホトトギス」系の俳人だったが、その影響は受けていなかった。

昭和十年(1935) 十五歳

高小卒業。四月、東京九段下の東京堂入社(現・トーハン)昼間は就業、夜間は実践商業学校に学ぶ。五月、東京堂の先輩渡辺保夫(「句と評論」所属)に勧められ、社内俳句会「野茨吟社」に参加。山口誓子句集『凍港』『黄旗』を借りて読んだことをきっかけに新興俳句系に作品を読み漁り、本格的に俳句を志す。

昭和十一年(1936) 十六歳

二・二六事件起きる。七月、同人誌「合歓」創刊、編集。「馬酔木」「句と評論」などに投句開始。

昭和十二年(1937) 十七歳

五月、渡辺白泉を訪問。同月創刊の「風」(白泉・小沢青柚子編集の同人誌)に参加を許され、八月号より作品発表。七月、盧溝橋事件勃発。同月、高谷窓秋に初めて会う。同人誌「生活感情」に第四号より参加。

昭和十三年(1938) 十八歳

寺川峡秋(「句と評論」所属)と共同編集の同人誌「朝」創刊。第四号を終刊号とし、「芭蕉館」に合併。「風」四月第七号にく戦争>五十七句を発表。山口誓子より激賞される。「風」は同号で終刊、「広場」五月号(「句と評論」改題)に合併。これに伴い、「広場」同人となる。その直後、西東三鬼を東京大森の住居に初めて訪問。

昭和十四年(1939) 十九歳

三鬼の斡旋により、「京大俳句」二月号より準会員。三月、実践商業学校を卒業。四月、東京堂を退社し、三鬼在职していた貿易商・合資会社紀屋(東京日本橋)入社。三鬼のただ一人の部下として働く。普通自動車免許取得。

昭和十五年(1940) 二十歳

弾圧により終刊号となった「京大俳句」二月で会員に推挙される。三鬼帰京、東京京橋に南方商会を作り、ブローカー業に従事。春、徴兵検査。第一乙種合格、歩兵。阿部青蛙方で白泉・青柚子らと古典俳句研究。技法追試による実作に没頭。

昭和十六年(1941) 二十一歳

二月、新興俳句弾圧が「広場」等、東京にも波及。六月刊の『現代名俳句集』(教材社版、阿部青蛙編)第二巻に、三橋敏雄集「太古」収載。十二月、日本は米英蘭に宣戦布告。

昭和十七年(1942) 二十二歳

春先に紀屋を退職。清水昇子経営の木産工業有限会社(東京浅草)に入社。十一月、結婚。十二月、三鬼神戸へ去る。

昭和十八年(1943) 二十三歳

七月、海軍編入通知、まもなく召集。横須賀海兵団に入団、海軍工機学校代位一分隊に勤務。蜂崗織炎・右肺浸潤により、横須賀海軍病院・大津日赤病院に入院、越年。

昭和十九年(1944) 二十四歳

二月、海軍工機学校に復帰。四月、長女信子誕生。

昭和二十年(1945) 二十五歳

八月二日、八王子市の留守宅焼失。十五日、敗戦。九月、八王子へ復員。

昭和二十一年(1946) 二十六歳

三月、運輸省航海訓練所に採用され、練習船事務長として船上勤務につく(以降、各練習船の事務長として昭和四十七年まで勤務)。十月、神戸寄港、三鬼に再会。「壺」客員同人になる。

昭和二十二年(1947) 二十七歳

八月、次女涼子誕生。三鬼の「天狼」創刊の計画を聞き、反対。

昭和二十三年(1948) 二十八歳

一月、「天狼」創刊されるが、投稿する気起きず。別途創刊の三鬼指導誌「激浪」創刊号より同人となるも、四号で廃刊。作句中止を決意。九月より、数度にわたり送還者・引揚者輸送業務に従事。

昭和二十八年(1953) 三十三歳

十月より三鬼主宰誌「断崖」(前年六月創刊)に同人として参加するも、作句再開には至らず、作風転換をはかる。

昭和三十年(1955) 三十五歳

『俳句』九月号<熱帯戦跡行>四十句発表。

昭和三十一年(1956) 三十六歳

「断崖」東京支部句会の指導を委嘱されて出席。三鬼、神奈川県葉山町に移住。

昭和三十二年(1957) 三十七歳

四月、協議離婚成立。五月、鈴木六林男に初めて会う。この年以降、「断崖」にはほとんど毎月作品発表。

昭和三十三年(1958) 三十八歳

指定安全海域内を航行中に水爆実験を目撃。

昭和三十五年(1960) 四十歳

『俳句研究』十二月号に三鬼との師弟対談。

昭和三十六年(1961) 四十一歳

現代俳句協会会員となる。

昭和三十七年(1962) 四十二歳

「天狼」同人に推される。現代俳人協会の分裂に際して退会(いづれも三鬼の意向による)。四月一日、六十一歳で三鬼永眠。

昭和三十八年(1963) 四十三歳

同人誌「面」創刊に参画。五月、佐藤鬼房の推薦を得て現代俳句協会に復帰。

昭和三十九年(1964) 四十四歳

十月、庄野孝子と結婚。

昭和四十年(1965) 四十五歳

渋谷区上原に転居、近隣に住む高柳重信・中村苑子を初訪問。八月、「俳句評論」四十六号より同人として参加。五月、父死す。享年七十一。八王子に戻る。

昭和四十一年(1966) 四十六歳

四月、第一句集『まぼろしの鱗』を俳句評論社より刊行。十一月、現代俳句協会幹事。

昭和四十二年(1967) 四十七歳

第十四回現代俳句協会賞受賞。

昭和四十四年(1969) 四十九歳

一月、白泉死す。享年五十六。本年度より四十七年度まで現代俳句協会賞選考委員。

昭和四十五年(1970) 五十歳

五月、三橋鷹女を初訪問。

昭和四十六年(1971) 五十一歳

二月、『西東三鬼全句集』を都市出版社より刊行。赤尾兜子・佐藤鬼房・鈴木六林男・高柳重信・林田紀音夫と共に「六人の会」を結成。

昭和四十七年(1972) 五十二歳

四月、鷹女死去。十一月、運輸省大臣官房福祉課に勤務。平河会館支配人併任。

昭和四十八年(1973) 五十三歳

十月、第二句集『眞神』を端溪社より刊行。

昭和五十年(1975) 五十五歳

十月、『渡辺白泉句集』を書肆・林檎屋より刊行。

昭和五十二年(1977) 五十七歳

三月、初期作品篇句集『青の中』をコーベックスより刊行。戦火想望俳句集『弾道』を深夜叢書社より刊行。天狼同人作品賞・スバル賞受賞。本年度と次年度、現代俳句協会賞選考委員を委嘱される。『俳句研究』十一月号<特集・三橋敏雄>。十二月、立風書房版『現代俳句集』第四巻に「三橋敏雄集」四百句収録。

昭和五十三年(1978) 五十八歳

七月、運輸省退職。

昭和五十四年(1979) 五十九歳

一月、第三句集『鷓鴣』を南柯書局より刊行。本年度と次年度の現代俳句協会賞選考委員。十月、間奏句集『巡禮』を南柯書局より刊行。

昭和五十六年(1981) 六十一歳

本年度と次年度の現代俳句協会賞選考委員。八月、母死す。享年八十六。教材出版『現代名俳句集』(昭和十六年刊)を底本とする句集『太古』を南柯書局より刊行。

昭和五十七年(1982) 六十二歳

三月、『三橋敏雄全句集』を立風書房より刊行(未刊句集『長瀉』併載)。十月六日、三鬼の名誉回復裁判に原告側証人として出廷(本件は翌年三月、全面勝訴)。

昭和五十八年(1983) 六十三歳

本年度と次年度の現代俳句協会賞選考委員を委嘱される。六月、高柳重信と共同編集した『三谷昭全句集』を俳句評論社より刊行。七月八日、重信死す。『俳句研究』編集長高柳重信の死去に伴い、阿部完市・高屋窓秋・三橋敏雄により、同誌編集委員会を結成。編集実務は澤好摩が担当(九月号より昭和六十年九月号まで継続)。十一月、『西東三鬼全句集』を沖積舎より刊行。十二月、「俳句評論」終刊。

昭和五十九年(1984) 六十四歳

四月、朝日文庫『現代俳句の世界』全十六巻の解説執筆開始(翌年五月完結)。十二月、『渡辺白泉全句集』を沖積舎より刊行。

昭和六十年(1985) 六十五歳

本年度より現代俳句協会賞選考委員を委嘱される(三年一期)。

昭和六十一年(1986) 六十六歳

昭和四年以来在住の八王子市東町における土地について深刻なトラブルに巻き込まれる。八月、不定期発行俳誌「壚母ローム」創刊、監修にあたる。

昭和六十二年(1987) 六十七歳

三一書房版『俳句の現在』に、鈴木六林男と共に三橋敏雄<何時迄草>収録。

昭和六十三年(1988) 六十八歳

日本文藝家協会会員となる。十月、八王子市より、妻の実家の小田原市南町に転居。十二月、序数第五句集『曇の上』を立風書房より刊行。

平成元年(1989) 六十九歳

『曇の上』により、第二十三回蛇笏賞受賞。本年度より詩歌文学館俳句部門の選考委員を三年間委嘱される。

平成二年(1990) 七十歳

三月、増補版『三橋敏雄全句集』を立風書房より刊行。

平成三年(1991) 七十一歳

四月、官歴により、勲四等瑞宝章を授与される。

平成四年(1992) 七十二歳

テーマ別句集『海』をふらんす堂より、俳句文庫『三橋敏雄』を春陽堂より刊行。

平成六年(1994) 七十四歳

角川俳句賞選考委員就任。以降、没するまで委員を務める(第四十回から四十七回)。

平成八年(1996) 七十六歳

序数第六句集『しだらでん』を沖積舎より刊行。

平成十一年(1999) 七十九歳

一月一日、高屋窓秋逝去。享年八十八。読売俳壇選者就任。四月一日、神奈川県葉山町で三鬼句碑除幕式。十一月三日、奈良県東吉野村に<絶滅のかの狼を連れ歩く>句碑を建立。

平成十三年(2001) 八十一歳

一月五日、中村苑子逝去。享年八十七。十一月二十六日、入院。十二月一日、小田原市内の病院で逝去。享年八十一。

「黒田杏子が聞く証言・昭和の俳句」収録の敏雄自筆年譜。「俳句」平成12年5月号/角川書店)掲載記事より。

三橋敏雄略年譜。

大正 9年(1920)

十一月八日、当時の東京府八王子市に生まれる。父儀平、母セイの次男。長男と三男は嬰兒期に死ぬ。家業は絹織物業。父は昭和初期の「ホトトギス」投句者。

昭和 10年(1935)

先に家業傾き進学を諦める。八王子市立尋常高等小学校高等科卒業。四月、東京九段下の書籍雑誌大取次店・東京堂(現トーハンの前身)に採用され、昼間は就労。夜間、実践商業学校に学ぶ。五月、社内の「野茨」俳句会に参加。15歳。

昭和 11年(1936)

「馬酔木」十月号に一句初入選。16歳。

昭和 12年(1937)

「句と評論」同人の渡辺白泉の作品に魅せられて私淑。白泉らの同人誌「風」第三号(八月号)より同人。自選句発表を許される。七月、日中戦争勃発。

昭和 13年(1938)

「風」第七号(四月号)に<戦争>と題する無季五十七句発表。山口誓子の激賞を受ける。六月、白泉と共に西東三鬼を訪問、白泉より三鬼師事を慫慂される。

昭和 14年(1939)

「京大俳句」二月号から自選句発表の準会員。四月、東京堂退職。三鬼在職の貿易商社紀屋に入社。三鬼のただ一人の部下として働く。普通自動車免許取得。

昭和 15年(1940)

二月、「京大俳句」会員。直後、弾圧を受け終刊。五月、徴兵検査、第一乙種。昭和 16年(1941)

六月、『現代名俳句集』に「太古」三橋敏雄集。十二月、大太平洋戦争突入。

昭和 17年(1942)

四月、紀屋退職。三鬼創設の南方商会を手伝う。十二月、三鬼神戸へ去る。22歳。

昭和 18年(1943)

七月、応召。横須賀海兵団入団、水兵。

昭和 21年(1946)

運輸省航海訓練所に採用され、以降、昭和四十七年まで

練習船事務長。26歳。

昭和 23年(1948)

「天狼」一月号創刊。これに投句者として参加する気なく作句中止を決意。昭和 30年(1955)

『俳句』九月号に<熱帯戦跡行>四十句発表。作句再開。

「断崖」に発表。35歳。

昭和 37年(1962)

一月、「天狼」同人。三鬼の推薦によるもので、希望してなかったが遺言のようにきく。四月一日、三鬼死す。

昭和 38年(1963)

同人誌「面」創刊に参画。

昭和 39年(1964)

十月、庄野孝子と結婚。

昭和 40年(1965)

「俳句評論」同人。高柳重信と親昵。

昭和 42年(1967)

第十四回現代俳句協会賞受賞。47歳。

昭和 61年(1986)

不定期刊「ローム」創刊。監修に当たる。

平成元年(1989)

第二十三回蛇笏賞受賞。69歳。